

## 〈論考〉

# オリンピックとSPレコード

——戦前におけるスポーツ、オリンピックの「受容」に関する一視点——

尾崎 正峰 一橋大学大学院社会学研究科教授

「SPレコード」との用語を聞いて一定のイメージを思い浮かべることができる人は今となっては圧倒的な少数派であろう。さらには、「SP」が「Standard Playing」の略であることや、その呼称自体が1940年代末に登場したLP (Long Playing) レコードやEP (Extended Playing) レコードとの区別のために使われるようになったことなどは、およそ知られていないであろう。いずれにしても、SPレコードは現代においては“過去の遺物”でしかないとの受けとめ方が一般的と言えようが、調整が施された専用の再生機にかけた盤面から流れ出る音の味わいは好事家ならずとも格別のものとの評価もある。また、盤面に刻まれているものは、音楽にとどまらず、歴史的に貴重な記録も数多く、CDやネット上のアーカイブなど多様な複製がなされている<sup>1)</sup>。

SPレコードを含めて「レコード」を対象とする研究は歴史的観点からのものをはじめとして多様であるが<sup>2)</sup>、体育・スポーツの研究領域からは、たとえオリンピック絡みであっても「レコード」や「音楽」に目を向けられることは(ある意味“当然”といえるかもしれないが)皆無であったといってよい。筆者は、これまでに「オリンピックと音楽」のテーマに絡めていくつか論考をまとめたが、それらの考察からオリンピックにおける音楽の位置は一般的に考えられているよりも大きいと指摘してきた。

本稿では、戦前のオリンピックに絡んだSPレコードに焦点を当てていくが、このテーマについてはレコードコレクター向けの雑誌などで一つのトピックとしてごくまれに取り上げられることはあったものの<sup>3)</sup>、系統的に提示されたことはこれまでになかった。その点からするならば、戦前のオリンピックに絡んだSPレコードが、音楽のみ

ならず多様なジャンルに及ぶ拡がりがあったことを示すだけでも一定程度の価値があると思われるが、一連のSPレコードに幾重にも折り重なって刻まれているさまざまな要素を解きほぐすことで、当時の政治、経済、社会に規定されながら人々がスポーツやオリンピックをいかに「受容」していたのか、その有り様と特質をレコードが表象していることについても示してみたい。さらには、今後の課題として、今回のテーマに関わる戦時期の国家(権力)とスポーツ(および、文化・芸術)について考察する視点を探してみたい。

## 1. 戦前のオリンピックとSPレコード

### (1) オリンピックへの熱狂とSPレコード

#### ～ロサンゼルス大会

すでに別稿<sup>4)</sup>で指摘したが、戦前日本におけるスポーツの大会やイベントに関わって楽曲が創られること、あるいは、レコードとして発売されることは、昭和という時代が産声を上げる前後の頃にまでさかのぼることができる<sup>5)</sup>。オリンピックについては1924年のパリ大会に出場する日本選手に対する応援歌《青年の歌》が最初との説もあるが<sup>6)</sup>、1932年のロサンゼルス大会からはオリンピックに絡んだSPレコードが多様に作成、販売されるようになり、以後、戦前を通じて、そして、戦後に至るまでその流れは続いていく(表参照)。

先駆けといえるのが、1932年4月、東京朝日新聞社・大阪朝日新聞社が「オリンピック派遣選手応援歌懸賞募集」を行い、第一等の歌詞に当時著名な作曲家・指揮者の山田耕筰が曲を付けた《走れ大地を》である<sup>7)</sup>。大会に赴く選手たちへの応援歌として、ほかに大日本体育協会とオリンピッ

ク後援会によって《応援歌 オリンピック》(作詞・作曲：堀内敬三)が選定され<sup>8)</sup>、ビクターからレコード(歌唱：四谷文子)も発売された。これらの応援歌は、新聞社が歌詞選定に関わっていたことなどもあり、レコードの新聞広告が頻繁に掲載され、多くの人々の目にとまった。

歌詞公募の形を取るなどしてオリンピックの応援歌を創り、レコードとして発売するに至る背景には、この時期の人々のスポーツ、そしてオリンピックへの関心の高まりがあったことは想像に難くない。こうした人々の心理をとらえ、取り込もうとしたのは国家も同じであった。オリンピックへの選手派遣に対して初めて国の補助金6万円が交付されたのは1924年のパリ大会であったが、ロサンゼルス大会では10万円に金額が引き上げられ、加えて、初めて天皇の御下賜金1万円が贈られた<sup>9)</sup>。国家の、さらには、天皇からの資金面での支援という目に見える形での“お墨付き”を得ることも相まって、人々のオリンピックへの関心はさらに高まりを見せていく。数多くの国家的行事の舞台となり、また、当時、盛んに企画・実施されていた新聞社の公募懸賞歌の新曲発表の場として「メディア・イベントの拠点」となっていた日比谷公会堂では、大会前の6月21日に「オリンピック派遣選手を送る夕」が催されている<sup>10)</sup>。

大会前からの盛り上がりをさらに増幅させたのが日本選手によるメダル・ラッシュであった。「水泳日本」なる造語も生まれたように水泳競技を中心に、金7、銀7、銅4を獲得した。前回のアムステルダム大会では、日本にとって初の金メダル(織田幹雄の三段跳び、鶴田義行の200m平泳ぎ)を獲得するも全体のメダル数が金2、銀2、銅1であったことと比較すれば大幅に増加し、参加38カ国中、アメリカ、イタリア、フランス、スウェーデンに次ぐ第5位となったことに対する「目覚ましき新興日本の躍進ぶりは各国を驚嘆せしめた」<sup>11)</sup>との自賛もむべなるかなというところであろう。

日本選手の活躍に対する新聞の論調も際立っていた。「日本の新聞や雑誌などでのオリンピック

報道は、アムステルダム大会からロサンゼルス大会までの間にはっきり変化」とされるが、このときの新聞報道は「強豪を相手に吉岡、けふ重大な一戦」「日章旗を揚げたら死んでも好い』必勝を期し南部君語る」などの大見出しに表れているように、「20年代までの報道に比べ、すべてが大仰で、威勢がいい」という特徴があり、大会が始まると「全体として単なる結果の報道から、むしろ競技の予想や期待についての報道が増え」といった<sup>12)</sup>。こうした新聞報道は、人々の熱狂をいやが上にもあおることになった。

大会後、人々の熱狂は最高潮を迎える。1932年9月3日、《走れ大地を》の合唱と演奏に迎えられてオリンピック選手団第一陣が横浜港に到着した。選手たちは「自動車四十台に分乗して横浜駅まで市内を凱旋し」、その後、「あでやかに装飾された特別列車」に乗り込んで向かった東京駅では「二千人の群衆が待ちかまえて」おり、「ホームは、選手たちと沸騰点に達した群衆の興奮によって支配され、東京駅頭と広場は、群衆と日の丸の小旗の海と化した」<sup>13)</sup>と描かれるように、選手たちを迎える群衆の熱狂の度合いは尋常ではなかった。

人々の熱狂的な盛り上がりを反映するかのようには、《勝って戻れば》や《オリンピック凱旋歓迎歌》など日本選手の勝利を祝う凱旋歌といった類いのレコードが相次いで発売された。これらの作品には、前述の山田耕筰や堀内敬三の他に、作詞に西条八十、サトーハチロー、作曲に中山晋平、山本直忠(指揮者・作曲家の山本直純の父)<sup>14)</sup>など、“売れっ子”、ないしは(後に)“大家”と称される名前が連なっている

人々を熱狂の渦に巻き込んだロサンゼルス大会に絡めたSPレコードの中に音楽以外のジャンルのもので「架空実況」と名付けられるものがあるが、こうしたレコードが発売されるに至る事情は次のようなものである。日本放送協会は大会の実況中継を計画し、大会前年の1931年に矢部謙次郎放送部長が渡米し、NBCと大会組織委員会に対して協力を依頼し受諾されたが、技術関係をNBCが提供、担当し、日本側はアナウンサー

のみの派遣で事足りるといふ「想像以上の好意」が示された<sup>15)</sup>。しかし、開催1ヶ月前の6月になって、折からの「不況による寄付金の減少や入場券の売れ行きへの影響を心配した組織委員会」が「NBCに十萬ドルの放映権料を要求、反発したNBCとの間で話し合いがつかずに実況放送は不可能」になった<sup>16)</sup>。こうした状況に対して協会は、駐米領事館経由の外交ルートも用いて解決へ一縷の望みを託しながら、当時、スポーツ中継で人気を博していたアナウンサー、松内則三、河西三省をはじめとするスタッフ4人をロサンゼルスに派遣した。結局、実況中継はできなかったが、「同情したNBCは、ロサンゼルス放送局から毎日一時間、日本向けに状況速報ができるようにしようと提案」した。日本のスタッフはこの提案を受け入れ「毎日競技場に行き競技を見てメモを作る。競技が終わるとNBCの放送局に出向き、メモを基にいかにも実況放送であるかのようにしゃべった」。これが「実況放送」といわれるものである。「窮余の策」としての「実況放送」であったが、「現地時間で夕方の実況放送は、日本では正午から午後一時までの昼休みに当たったことや、日本水泳チームが六種目のうち五種目に優勝したこともあって人気が沸騰、ラジオの前には黒山の人だかりが出来た」という<sup>17)</sup>。こうした大会での日本選手の活躍を伝えるラジオ放送に対する人々の熱狂を目の当たりにして、一つの商機を見いだした太陽レコード(太陽蓄音機のレーベル)が、「実況放送」と同じく、競技を取材したメモを元にスタジオで吹き込む方法で制作したレコードが「架空実況」版で、河西アナウンサーの“実況アナウンス”がA面に、B面に歌が収録されている<sup>18)</sup>。

## (2) レコードによる“実況”の興奮、再び ～ベルリン大会

このような人々のオリンピックへの関心の高まり、大会における日本選手の活躍に対する熱狂をベースとしたSPレコードの制作という流れは、次のベルリン大会でさらに勢いを増していく。ロサンゼルス大会と同様に、《オリンピック応援歌

あげよ日の丸》(作詞:山本槐二、作曲:山田耕筰、歌唱:中野忠晴)のような新聞社の歌詞公募企画による応援歌の制作、ロサンゼルス大会の時の応援歌の再録音などが行われたほかに、「情緒豊かな民謡調の歌と踊りで選手を声援しよう」<sup>19)</sup>という《オリンピック会津磐梯山/オリンピックおけさ》のような一風変わった趣向のものもあった——《オリンピック会津磐梯山》の作詞の平沼亮三は、当時、日本陸上競技連盟、大日本排球協会(現、日本バレーボール協会)、全日本体操連盟(現、日本体操協会)といった各競技連盟の(初代)会長を務め、大日本体育協会副会長でもあった——。また、日比谷公会堂で、大会前の5月28日に「オリンピック蹴球選手送別音楽会」(主催:オリンピック蹴球選手後援会)が催されている<sup>20)</sup>。

そして、7月のベルリンでのIOC総会で1940年大会の日本招致が決定したことに続く、大会での日本選手の活躍、メダル獲得によって、再び、人々のオリンピックへの熱狂がもたらされる。新聞報道もロサンゼルス大会以上に熱を帯び、このとき初めて実現した写真の無線伝送によって開会式の翌日には式典の様子が「アルバム風」に紹介されるほどであった。実況中継的な無線電送写真は、その後の競技報道でも紙面を視覚的に構成する上で活用された<sup>21)</sup>。

こうしたオリンピックへの熱狂をめぐる動きはSPレコードの領域でも同様であった。歓迎歌などの音楽ジャンルにとどまらず、競技や勝利に対する興奮や感動を再現し、追体験するレコードの発売が相次ぎ、音楽ジャンルのレコードの数を凌ぐまでになった。ここにもラジオによる“実況”放送が絡んでいた。

ベルリン大会では、オリンピックとして初めて外国向けの実況放送を行った。ドイツからの短波送信を各国受信施設で中波に変換し国内放送をするというシステムであった。そして、1936年8月2日、日本で最初のオリンピック実況放送である開会式中継が行われた。ただし“実況”といっても、前日の8月1日に実況ナレーションを現地で録音し、開会式は約2時間であったため放送用

に短く編集し、所定時刻にあわせて日本に向けて短波放送を行うという方式だった。こうした方式を可能にしたのは、ドイツ宣伝省の管轄下にあったドイツ放送会社（RRG）に対して、ナチスが「莫大な国費をつぎ込んで」オリンピックに向けて「全世界に合計92の放送・録音ができる態勢」を組んでいたことによる。「当時の日本放送協会はまだ放送用の録音装置を持っていなかったから、このドイツの放送設備には「唯々驚嘆」の他はなかった」とされる<sup>22)</sup>。日本ポリドールが発売した大会の様相を伝えるレコード5枚のうち、開会式とマラソンを収録した2枚は、こうした現地での放送用の録音を「巧みに切りつないで編集して原盤を作った」ものであった。そのため、レコードのタイトルは「実況」であって「実況放送」としていない<sup>23)</sup>。残りの3枚は、レコードのレーベルに「実況放送」の文字とともに「伯林オリンピック・プールより」と括弧書きの記載があるが、その中でも「前畑ガンバレ」の絶叫で日本放送史上に名を残す河西三省アナウンサーの実況を刻んだレコードは今なお注目される（このレコード作成の「秘話」については「補論」において後述する）。

これらの実況放送の録音版とは別に、アサヒレコード（名古屋のアサヒ蓄音器のレーベル）が「優勝実況レコード」と謳って売り出した4枚は、「ラジオ放送をもとに台本を作成して、スタジオで別人が録音」した「実況再現版」であった。「モース信号やファンファーレや観衆の声などを配し、なかなか臨場感ある録音」であり、アナウンスの口調も河西アナウンサーのものとよく似ていて「初めて聴いた人はラジオ放送を録音したものかと思ってしまうほどの出来映え」と評されるものである<sup>24)</sup>。アサヒレコードは、“本物の”実況放送を元にしたポリドール盤よりも「2週間以上前に売り出す」という販売戦略を採ったが<sup>25)</sup>、それほど人々に“受ける”と踏んでのことであろう。ベルリン大会に絡んでは、その他に、漫才や落語に至る多様なジャンルのレコードが制作されていた<sup>26)</sup>。

こうした過熱気味の状況に対して危惧の念を表

明したのが末弘巖太郎であった。末広は、民法、労働法学の研究者であり、東京帝国大学教授であるとともに、1927年、大日本水上競技連盟（現、日本水泳連盟）の会長に就任している。末広は、「いままである応援歌のどれをみてもやたらに選手を英雄視したり、あるいはむやみやたらに勝てーと、まるで選手を競馬の馬のように扱ったりしている」、「見物人からみたスポーツを歌っていて選手の気持ちなどには触れていない」、「歌詞が難しい言葉だらけで、歌っていても何のことだかわからないことが多い」などの不満を持っていた。読売新聞からの応援歌の作詞の依頼に対して「芸術的なものなどはできっこないとしつつもこれを引き受け、「子供にもわかる実感をもった勇ましい歌にこしらえあげよう」と苦心しながら完成させたものが、応援歌《起てよ若人》（作曲：中山晋平、歌唱：徳山璉）である<sup>27)</sup>。

四番の歌詞の「夕空晴れたり篝火は／見よや消えゆくオリムピア／若等のつとめはおわりぬ今ぞ」という、アムステルダム大会（1928年）からスタジアムに灯されるようになった聖火が閉会とともに消えていく情景を、選手の視線からその心情と共に描いたとおぼしきフレーズに、末広の思いの一端が表れている。その一方で、冒頭の「日出づる国の若人よ」との文言、また、一番から三番までそれぞれの最後に「起てよ若人／（征きて・強く・清く）闘へ／御国の為（あ）にぞ協はせよ力」と綴っている点に、ロサンゼルス大会以後顕著となったオリンピックと国家（の威信）を結びつける動きに影響を受けているといえる。そして、「オリンピック放送のあった期間、毎晩ベルリンからの実況中継（午後11時～12時）の前の午後10時45分から15分間、東京のスタジオでその日の競技の解説」を行うのに先立って《起てよ若人》のレコードが流された<sup>28)</sup>ことも象徴的である。末広は、その後、水泳の普及啓蒙のための《国民皆泳の歌》（1943）でも作詞の筆を執った。この楽曲の作曲は東京音楽学校名義で、編曲は同校作曲科教授の橋本國彦があたっている<sup>29)</sup>。

続く（はずであった）1940年大会は、日中戦争

の開始によって返上が決定し「幻」となったため、ロサンゼルス大会やベルリン大会と比べると創られたレコードの数は少ない。その中で目立ったものは、この時代を代表する俳優、コメディアンである古川緑波(「ロッパ」と表記されることもある)の《東京オリンピック》である<sup>30)</sup>。

## 2. オリンピック関連のSPレコードに刻まれているもの

オリンピックに絡めた応援歌などの楽曲の創作や競技の「実況」のレコード化が相次いだことについて、応援やメダル獲得の顕彰とは名ばかりの“便乗商法”的な側面があったことは否定できないであろう。しかし、それだけでは、レコードが人々に受け入れられ販売数が相当数に上った盤があるといった事実を説明しきることはできないであろう。当時の、政治、経済、社会、文化、そして人々の生活を視野に入れることで見えてくる、この“喧噪”の別の背景を探ってみたい。

### (1) 「複製技術時代」<sup>31)</sup>の「文化生活」

#### ～レコード産業の成立と娯楽の拡大

オリンピックに絡んだSPレコードの発売が相次いだ背景として第一にあげられるものは、日本におけるレコード産業の展開である。1907年、日本で最初のレコード会社「日米蓄音機製造株式会社」の設立後、大正時代には後続のレコード会社が誕生する。昭和に入ると、外国資本のレコード会社による日本法人の設立もあり、レコード産業が本格的に展開する時代を迎えたが、裏を返せば、レコード会社の「乱立」という言葉が当てはまる状況を生み出し、“売らんかな”の姿勢丸出しのような企画とおぼしきものも見受けられるようになった。いずれにしても、クラシックなどの「洋楽」をはじめとして「邦楽＝流行歌」等にジャンルも拡がり、レコードの生産枚数も1929年には1,000万枚を超え、以後も増加を続けていった<sup>32)</sup>。

レコード産業の展開を支えたものとして、1920・30年代の「戦間期」に表れた新しい生活様

式がある。上層と下層の分化の進行、そして、都市と農村の格差は依然あったものの、さまざまなメディアによる情報伝達の多様化の中で、「文化生活」が人々の手が届きそうな生活の目標、あるいは憧れとして位置づけられた。「文化生活」とは、「ある特定の階層に固有の生活様式」でもなく、「一握りの高学歴エリートにしか許されない生活様式」でもなく、「大衆的な性格をもった生活様式」であり、「複数のモノの組み合わせを消費すること」であった<sup>33)</sup>。戦間期、「文化生活」を表象する新たなモノが次々に供給され、その購入、消費を通して「文化生活」の「高度化」を指向する意識が人々の中に強くなっていく。娯楽の拡大も顕著であり、多様な趣味活動を人々が行なうようになった。蓄音機もレコードも決して安くはなかったが、何とか人々の手の届くモノとなり、1924年の大阪ミナミの楽器店で、もっとも安価なものでも60円であったアメリカ製の蓄音機、すなわち「舶来品」が「一日当たり10台売れた」<sup>34)</sup>ほどであった。このように、この時期、レコード鑑賞は人々の娯楽として定着していった。

### (2) 「天皇報道」のインパクト

#### ～ラジオ放送の全国化

ラジオの本放送は1925年7月に始まるが、その影響力の大きさを示す出来事が早々に起こる。1926年10月後半に明らかにされた大正天皇の病状の悪化と12月25日の崩御である。天皇の容体を伝えるニュース放送は1926年11月3日から始まり、12月に入ると体温、脈拍、呼吸などの数値を含めた病状が1日に10回近くも放送されるほどであった<sup>35)</sup>。そして、1927年2月7日と8日、大正天皇の葬儀の儀式を行うための葬列の移動の模様を伝えるラジオ放送はさらなる展開を見せた。葬儀の模様を伝える放送を聞く人々は「実況中継」と思い込んでいたが、実際には宮内省の検閲を経て許可された「進行に合わせた予定原稿」を「愛宕山のスタジオからアナウンサー」が「現場からのブザーの合図」によって「順序に従って原稿を読む」という手法が採られていた<sup>36)</sup>。さら

には、青山御所（高松宮邸）西門前に立てた春日灯籠のなかに仕掛けた集音マイクで拾った音をアナウンスにかぶせて放送することで“臨場感”を演出した<sup>37)</sup>。この放送に多くの国民が聴き入り、受信機の前で「えりを正し」「ひれふし」哀悼の意を表すなど大きな反響を呼んだ<sup>38)</sup>。

同様の手法は、1928年11月6日、京都で行われた昭和天皇即位の大礼においても用いられたが<sup>39)</sup>、大正天皇の葬儀の放送時から変化したことは、「国民統合のシンボルの強化をはかる」ことをねらって所轄官庁の通信省が日本放送協会の全国中継網の建設を急がせた結果、即位の大礼の様子が、全国の各放送局一斉に同時放送がなされたことであった<sup>40)</sup>。一連の「天皇報道」は、戦前の時代における天皇制という規定要因があったにせよ、また、受信機を所有する割合は未だ低かったにせよ<sup>41)</sup>、ラジオが国民教化、統合を促進する上で力を持つメディアであることを知らしめた出来事であるとともに、ラジオが「マスメディアとして大きく飛躍した」ことを示すものであった<sup>42)</sup>。

### (3) スポーツを“聴く”時代

#### ～ラジオとスポーツ中継

こうして存在感を増していくラジオ放送であるが、初めてのスポーツの実況放送は、1927年8月13日、大阪中央放送局（JOBK）による甲子園球場からの第13回全国中等学校優勝野球大会第1日目の中継であった。当時、放送内容はすべて通信省の事前検閲を受けることになっていたため、試合の状況によっては何が起こるか予測できない野球の試合をどのように伝えるかが難問であった。大阪通信局との交渉の末、アナウンサーの横に監督官を座らせ、“不穏当”な発言があった時点で放送を取りやめるということで決着した<sup>43)</sup>。東京での初の野球中継は、東京中央放送局（JOAK）による、8月24日に神宮外苑球場で行われた一高対三高戦であった。そして、1929年からは、前述の昭和天皇即位の大礼の放送のために全国中継網が整備されたことで、全国にスポーツ中継が行き渡ることとなった。

当時は、早慶戦に代表される学生スポーツ隆盛の時代であり、ラジオ放送におけるスポーツ中継、とくに野球中継の人气が絶大であった。ラジオを通じた“聴くスポーツ”の拡がりとその特質については、「野球は、ラジオを媒体にすることによって大衆との結びつきを深め、映画と並ぶ近代的な大衆娯楽となり、都市の住民を中心に、多様な社会層に受け入れられていった」など、すでにスポーツ史の領域で言及されてきた<sup>44)</sup>。他の研究領域からも「それまでスポーツに縁のなかった人びとに“聞くスポーツ”の面白さをラジオが教えたのである。すなわちエンターテイメントとしてのスポーツの新しいジャンルを切り開いた」と指摘されている<sup>45)</sup>。

野球中継を筆頭とする“聴くスポーツ”の拡大は、ラジオ放送の側にも恩恵をもたらすことになる。「スポーツの実況放送は、新しい聴取者層の創出と聴取者契約の増加に大きく貢献」したのである<sup>46)</sup>。こうした関係は、レコード産業とラジオ放送の間にも同様のものを見いだすことができる。ラジオが急速に普及する中、ラジオはレコードの宣伝媒体として重要なものとなり、ラジオの側は人気の高い流行歌を放送で流すことで聴取率が上がり、そのことがさらなるレコードの売り上げにつながるという、共存共栄、持ちつ持たれつとの関係が成立した<sup>47)</sup>。

スポーツの実況放送で人気の高かった松内則三アナウンサーをメインに据え、早慶両校の応援団も登場する「早慶野球争覇戦」と題された2枚組のレコードがビクターから発売されたことは象徴的であろう<sup>48)</sup>。この他に、慶應義塾大学時代、投打両面で主力として活躍し、1936年に設立された阪急軍に入団した宮武三郎が、早稲田との対戦を回顧する語りのレコードもコロンビアから1931年5月に発売された<sup>49)</sup>。

大衆文化の展開<sup>50)</sup>が顕著となった当時、人々はスポーツを“聴く”ことで、スポーツを“見（視）る”気分を味わい、熱狂するなど、「聴くスポーツ」を娯楽として日々の生活の中に取り込んでいた<sup>51)</sup>。オリンピック応援歌などの音楽ジャンルのレコード

が数多く世に送り出されるとともに、大会での競技の模様を(たとえ“架空”であっても)録音したレコードが創られ、販売され、社会の中で受け入れられていったのには、こうした背景があった。

#### (4) 国家の介入、統制による変容

##### ～今後の課題と関わって

日中戦争の開始によって国家によるスポーツや文化への介入は苛烈さを増していく。1937年3月、国会での河野一郎の演説が口火を切り、1938年7月15日の閣議で確定した1940年大会の返上がその典型と言えるが、それ以前から兆候は現れていた。

レコードについてみれば、1934年5月、出版法と著作権法が改正され、レコードも出版物と見なされるようになり検閲の対象となり、1936年6月に《忘れちゃいやヨ》(作詞：最上洋、作曲：細田義勝、歌唱：渡辺はま子)に対して発売頒布禁止の措置が執られた。そして、1940年12月には、内閣情報部の「内閣情報局」への改組によっていくつかの省に分散していた機能を集約し、音楽、レコードを含め文化政策全般を「総合的に指導」していくことになる<sup>52)</sup>。

また、1937年10月から国民精神総動員運動が開始されたことで、ラジオ放送への国家の介入がより顕著となり、スポーツ放送は自粛を強いられ、徐々に縮小していった<sup>53)</sup>。それは、「思想善導」の姿勢を継承した、「スポーツ放送における「娯楽性」の全面的な否定」であり「体育放送」の出現を意味していた<sup>54)</sup>。

戦時期の国家統制と文化の関係に着目した先行研究では、日中戦争の開始時は「文化創造の面では新たな高揚期を迎えていた」時期でもあり「戦争の開始によって創造的な文化活動が途絶えてしまったわけではなかった」と同時に、その後の「総力戦下において一切の文化活動は国家総動員の一環として重視され、国策の一翼になうという枠のなかでの活動を余儀なくされることになった」<sup>55)</sup>との指摘をはじめとして多様な議論がなされている<sup>56)</sup>。これらの議論をふまえてのスポーツとレ

コードに関する戦時期的な実証的な考察は今後の課題としたい<sup>57)</sup>。

#### おわりに

スポーツ、オリンピックにとって迂遠のものにとらえられてきたレコードが、戦前、人々のスポーツ、オリンピックの「受容」において、特異な、しかし際立った存在感を示しているのを見てきた。

オリンピックに絡んだSPレコードは、1940年大会の返上によってひとつの区切りが付けられるが、前述のように、オリンピックに絡めて楽曲が創作され、レコードが発売されるという流れは戦後にまで継承される。しかも、戦前生まれのオリンピック応援歌《走れ大地を》が1964年大会を迎えるにあたって、文部省が作成した『オリンピック読本』〈小学生のために〉版に楽譜と歌詞が掲載され、歌手を変えて新たにレコード化もされている。『読本』掲載や「再録音」の経緯は不明であるが、戦前と戦後の歴史の連続性を感じさせる一事ではある(今となってはかかなり“時代”を感じさせる歌詞であるため、「2020」に向けて“再登場”の可能性は低いかもしれないが、何かの折に取り上げられることもありえよう)。また、1964年大会時、開会式をはじめとするテレビやラジオの中継の競技実況音声を各社がこぞってレコード化したように<sup>58)</sup>、「実況録音」の扱い方についても戦前を継承している。

こうした戦後の時代の流れを視野に入れ、とらえ直し、前述の課題を含みつつ、あらためてスポーツ、オリンピックと音楽、レコードに関する像を描くべく他日を期したい。

#### <補論——「前畑ガンバレ」の“音声”とレコードをめぐって><sup>59)</sup>

1936年、ベルリン大会における女子200m平泳ぎ決勝の前畑秀子とドイツのゲネンゲル選手との手に汗を握るデッドヒートを伝える河西三省アナウンサーによる「前畑ガンバレ」の絶叫を伴った実況中継は、戦前のオリンピックを回顧する場

合、必ずといってよいほど取り上げられる<sup>60)</sup>。当時の人々のオリンピックへの関心の高まりや大会での日本選手の活躍に熱狂する人々の意識を映し出す鏡として象徴的な存在と言ってよい。

しかし、この「歴史的音声」は放送とともに消え去り、文字としてのみ、あるいは、伝聞調の“伝説”として語られるだけのものとなったかもしれない。前述のように、当時、日本には放送用の録音設備はなく、放送をラッカー盤に直接刻み込むことなどの技術的措置も通常はなされなかった。オリンピックというビッグ・イベントの模様を伝える中継放送についても変わることはなく、実況アナウンスの音声はそのまま消え去る運命にあった。しかし、現在に至るまで河西アナウンサーの“生の音声”を聴くことができる。その裏には次のようないきさつがあった。

日本ポリドールレコードの録音スタジオに在職していた湯地富雄は、同僚の技術者からの「オリンピックの放送を録音してみようじゃないか」との発案に応え、手始めに通常より雑音の少ない放送受信機の作製に取り組んだ。録音をする競技の選定にあたっては、当時のレコードの収録時間が片面3分程度であったことが大きな判断材料となった。競技時間の長さそのもの、そして、おおよそその競技時間が予想できる点から水泳競技に的を絞ることとした。その中でも女子200m平泳ぎは、前回のロサンゼルス大会において僅差で金メダルを逃した前畑秀子への期待ともあいまって入念に準備を行った。放送開始の時間を迎え、スタートの頃合いを見計らってカッターの針を原盤に下ろしたところで、競技が、そして録音が始まった。前畑は念願の第1位となった。河西アナウンサーのあの“絶叫放送”を聴きながら思わず知らず興奮したこともさることながら、レコード片面にピッタリと録音することができたという技術者としての達成感から、湯地はエンドサークルの間に針の先で「女子200m」の文字を思わず書き込んだ——この文字は、製品製造の原盤作成の際に消せるものであったが、なぜかそのままとされ、「手書き文字」が刻印されたまま製品が世に出回ること

になった。筆者所有のSPレコードでも当該の文字が刻まれていることを確認できる。

こうした作業を繰り返すうちに録音原盤が十数種類できあがった。これを聴いたポリドール社の幹部はレコードとしての発売を思い立ち、日本放送協会東京中央放送局へ交渉に赴いたが、公共放送を無断で録音したこと、おまけに、それを商売にすることなどもつてのほかと「ケンもホロロ」に断られた。せつかくの録音原盤も廃棄処分の憂き目になりかけたところ、風向きが一気に変わった。前畑の優勝レースをもう一度聴きたいという再放送の希望が放送局に殺到したのである。しかし、繰り返すように、放送を録音する設備もなければ、その気もなかった放送局は再放送をたくてもできなかった。そこで、両者による再度の交渉がもたれた結果、著作権は日本放送協会にあるとしてレコードの版權を協会に譲渡すること、ポリドール社側はレコード発売の認可を受けるとの条件で折り合いが付いた。前述の「実況放送」、「伯林オリンピック・プールより」と記載があるSPレコード3枚に「日本放送協会著作権所有」との文字がレコード盤のレーベルに書かれているのはこうした所以からである。

こうしてレコードとして発売され、多くの人々の手に渡り、広まり、そして、現在にまで語り継がれている。「歴史的音声」がそのまま「音」として現在にまで継承されたのはSPレコードの存在ゆえであった。本稿の冒頭で記したように“過去の遺物”でしかないともされるSPレコードであるが、「歴史的記録」として、その後の時代に至るまで人々の認識を規定する上で大きな役割を果たす存在であることを示している。

#### <付記>

金沢蓄音器館館長の八日市屋典之氏には、インタビュー調査(2019年10月2日、於：金沢蓄音器館)において、本稿で取り上げたSPレコードのいくつかを実際に確認させていただいたほか、戦前のSPレコードをめぐる状況について多くの情報をいただいた。記して謝意を表したい。



## 【注】

- 1) たとえば、国立国会図書館「歴史的音源」(<http://rekion.dl.ndl.go.jp/>) など。
- 2) 日本語文献では、たとえば、倉田 (1979)、岡 (1986)、細川 (1990)。その他、フランクフルト学派のアドルノの音楽に関する著作も参照。
- 3) 岡田 (2013)、志浦 (2008)、など。
- 4) 尾崎 (2020)、参照。
- 5) 倉田 (1979)、268 頁、および 377 ~ 380 頁。
- 6) 「読売新聞」1956年6月25日付朝刊
- 7) この楽曲が創られた経緯等についての詳細は、尾崎 (2020) を参照。
- 8) 「読売新聞」1932年5月10日付朝刊
- 9) こうしたオリンピック参加に対する国家からの金銭的な補助の開始と拡大は、1920年代以降の「思想善導」政策の展開の一環に位置づくものであった。また、1931年の満州事変など日本の侵略的行為に対する国際的な批判に配慮して「スポーツ外交」の手だてとしてオリンピックを利用しようとする意図も伏在していた。坂上 (1988)、とくに「第三章スポーツによる“思想善導”」参照。
- 10) 新藤 (2014)、319 ~ 325 頁、および、199 頁。
- 11) 大日本体育協会編 (1936)、677 頁。
- 12) 吉見 (1998)、23 ~ 24 頁。
- 13) 坂上 (1998)、184 頁。
- 14) 《オリンピック陸上選手応援歌》は、山本がドイツから日本に帰国した直後のタイミングで作曲された。
- 15) 竹山 (2002)、191 頁。
- 16) NHK 放送文化研究所 (2002)、31 頁。
- 17) 同前、32 頁。日本放送協会のオリンピック放送の実施担当者であった頼母木真六は「放送事業としての参加は、日本一国、而も僅か四人の一行に依て、完全に世界をリードしたことを思へば寧ろ大成功であると云ふを憚らない」と綴っている。頼母木真六「オリムピック放送を語る」『調査時報』第2巻第20号 (1932)。
- 18) 岡田 (2013)、171 頁。なお、『週刊朝日』1932年8月増大号の誌上に、「実感放送」での松内アナウンサーによる実況アナウンスが「文字」として採録されている。竹山 (2002)、193 ~ 195 頁、参照。
- 19) 岡田 (2003)、172 頁。
- 20) 新藤 (2014)、207 頁。
- 21) 吉見 (1998)、24 頁。
- 22) 竹山 (2002)、204 ~ 207 頁。RRG は、クラシック音楽の領域において、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー (1886-1954) 指揮のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団による戦時中の演奏を放送のために数多く収録した機関としてたびたび話題に上るが、その際「ドイツ帝国放送(局)」と記載されることが多い。
- 23) 志浦 (2008)、102 ~ 103 頁。
- 24) 岡田 (2013)、174 頁。
- 25) 志浦 (2008)、104 頁。
- 26) ベルリン大会を通して見られる人々の熱狂をあおる国家や新聞報道について「オリンピックをその理念であるインターナショナリズムという脈絡で捉えるという発想はほとんどない。逆に、欧米への対抗、日本の「国力」「皇威」発揮の場として宣伝している」と指摘されている (有山 (2001)、17 頁)。しかしながら、大会での日本選手の活躍などの成果も「中国にたいする日本の侵略行為を国際政治の場で認めさせるには無力に等しかった」現実がある (坂上 (1998)、192 頁)。
- 27) 「読売新聞」1936年5月5日付朝刊。引用にあたって漢字、仮名遣いを現代表記に改めた。
- 28) 竹山 (2002)、203 頁。
- 29) 日本コロムビア、商品番号：32015、1942年6月発売。国立国会図書館「歴史的音源」<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1314928> (2019年8月20日閲覧)
- 30) この楽曲は、大会と同様に、多くの人々にとって「幻」の作品であったが、国立国会図書館「歴史的音源」での“復刻”がなされている <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1323377> (2019年

8月20日閲覧)

- 31) ベンヤミン (1970)、参照。
- 32) 倉田 (1979)、生明 (2016)、参照。
- 33) 田崎 (2012)、参照。
- 34) 倉田 (1979)、266頁。
- 35) 竹山 (2002)、72～80頁。このときの放送内容を見ると、そして、天皇の病状悪化が宮内省より発表されて以後、演芸などの娯楽的放送を自粛したことをあわせてとらえてみると、後年、昭和天皇の病状悪化が明らかにされて以後の放送メディアや日本社会の状況を想起させる。
- 36) 日本放送協会編 (1977a)、48頁。
- 37) 竹山 (2002)、95頁。
- 38) 同前、111頁。
- 39) 日本放送協会編 (1977a)、60頁。
- 40) 竹山 (2002)、116～117頁。
- 41) ただし、受信機を所有する家に地域の人々が集まって聴き入るといふ「街頭ラジオ」「街頭テレビ」のような状況があったことで、実際には、所有率から換算されるよりも多くの人々が放送を聴いたものと推し量ることができる。
- 42) 竹山 (2002)、117頁。
- 43) 同前、167頁。この後も隣席に監督官がいることが続いたが、これを苦々しく思っていた戦前の名アナウンサー和田信賢が「はかない抵抗」をしたとのエピソードが残されている。橋本 (1992)、127頁。
- 44) 高津 (1994)、243頁。坂上 (1998) も参照。
- 45) 竹山 (2002)、166頁。他に、渡辺 (2017)「第1章「実況中継」の精神史——「耳で聴くオリンピック」の背景文化」も参照。通信省と日本放送協会による「番組種目嗜好および聴取状況調査」(1937年)によれば、「嗜好率」では「浪花節」(83.6%)「落語・人情噺」(78.7%)「ラヂオドラマ」(78.5%)が上位3つを占め、「講談」「漫才」などが続いており、大衆娯楽的な種目が人気を得ていたことがわかる。こうした中で、「野球」(63.6%)と「相撲」(55.5%)が上位に位置する一方で、「水上」(44.4%)と「陸上」(34.2%)が中位であり、「庭球」(9.3%)と「蹴球(ア式・ラ式)」(8.6%)のように数字がやや伸び悩む種目もあった。日本放送協会編 (1977b)、601頁。
- 46) 高津 (1994)、248頁。
- 47) 生明 (2016)、参照。
- 48) 盤番号：52014、52015。1931年10月発売。松内のアナウンスを聴くと、「“松内節”ともいえる独特の名調子で、聴く人の心を惹きつけていた」(橋本 (1992)、34頁)と評されることもさもありなんと納得させる。ただし、ここでの試合内容は「架空」であり、松内によれば「大体創作七分に過去の記録三分」とのことである(渡辺 (2017)、50頁)。さらには、松内の実況アナウンスを元にして、文藝春秋社が創刊したばかりの『オール読物号』1931年8月号に「早慶大決勝戦記」として掲載されてもいた。
- 49) 「スポーツ：忘れ得ぬ早慶戦の思い出(上)(下)」、盤番号：26363、国立国会図書館「歴史的音源」<http://rekion.dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1316885> (2019年8月20日閲覧)。
- 50) 高岡 (2015)、227～232頁。高岡は、戦時期文化政策は、産業化・マスカルチャー化と、その下における「文化の二重構造」を前提として登場してくるとしている。
- 51) ただし、都市と農村、あるいは経済的基盤によるスポーツの享受の格差が厳然と存在していた。
- 52) 戸ノ下 (2008)、戸ノ下 (2010)、参照。また、戸ノ下、長木 (2008) も参照。オリンピックやスポーツに絡んだレコードについては、本文で見てきたように、「ナショナル・プライド」の喚起、国威発揚の面において有効な手段として権力側もとらえており、検閲によって発禁の対象となることは考えにくいであろう。しかし、戦争が本格化し、スポーツへの統制が厳しくなる中で、どのような変化が現れていたのか。具体的な資料や素材の発掘ととも

に、実証的な検討は今後の課題である。

- 53) 橋本 (1992) 「9 立ちこめる暗雲」「10 戦時下のスポーツ放送 (一)」「11 戦時下のスポーツ放送 (二)」の項、および、放送文化研究所 (2002) 「第2章 戦時下の放送」、参照。
- 54) 高津 (1994)、318～320頁。
- 55) 北河 (1988)、250～251頁。
- 56) 前掲の高岡 (2015) の他、先行研究が示している視点の概略をいくつか記せば、「戦前から戦中の時期は、単なる「暗い谷間」の時代だったのではない。というよりも、「暗い谷間」にもかかわらずさまざまな領域で文化創造の営みがあり、一定の成熟が見られたという点に注目し、「新たな国家統制の動きと、これに対する自主性の擁護の動きの、二つの対抗を基軸」とすることを提起するもの (赤澤・北河 (1993)、4～8頁)。「戦時期といえども、あるいは戦時期であったからこそ、社会は一種の熱気を持ち、あだ花であったかもしれないが、文化は独特の花をさかせたという側面を無視することはできない」とするとともに「この時期の政治の力を軽視」することなく、「国家統制と自主的擁護の対抗という基軸に加えて、両者の相乗的増幅という基軸を設定」し「上からの国家統制と下からの自主的動向とは、対抗しあうこともあったが、また相乗的にはたらき、互いに相手と自己を増幅していった」ことに着目するもの (津金澤、有山 (1998)、序)。1930年代・1940年代のメディア、民衆、そして国家の統制などをめぐる体制を見る場合、「上からの操縦、下からの能動的参加のどちらかといった二者択一ではなく、両方の契機が絡み合いながら進行する」ことに注視し、「政治権力、メディア、民衆それぞれの相互関係のあり方」の見直しを提起するもの (有山 (2001)、3頁) などである。
- 57) 「国民歌謡」や戦時歌謡・軍歌の動向 (前掲の戸ノ下の一連の研究成果の他に、細川 (1993a、b、c)、小村 (2011)、古茂田、島田、矢沢、横沢 (1995)、園部 (1980) などを参照)、

戦時期における多様なスポーツの姿 (前掲の高津 (1994)、坂上 (1998) の他に、坂上／高岡編著 (2009)、高嶋航 (2012)、高嶋航 (2015) などを参照) を視野に入れた検討となる。

- 58) 別の視点であるが、レコード化された「音声」について、尾崎 (2020) で検討した。渡辺 (2017)、36～39頁も参照。
- 59) この項の叙述は、数字を付した注以外の部分は、湯地 (1996) を元に行っている。他に、志浦 (2008) も参照。
- 60) この実況アナウンスがあるがために“熱い”アナウンサーとして河西のイメージが現在では定着していると言ってよいと思われるが、彼本来のスタイルは、「河西の放送を聴けば、そのままスコアブックをつけることが可能と評されたほどで、プレーを中心とする写実的なアナウンスに徹していた」(橋本 (1992)、39頁) というものであった。このことからすれば、「前畑ガンバレ」の実況は彼にとっても“異例中の異例”だったといえる。一世を風靡した実況アナウンスであったが、“応援放送”でしかなくスポーツ中継としては“欠陥商品”だとの批判も起こり、河西自身、「いつもの冷静さを欠いた実況中継が面はゆかったのか、自宅ではこのレースの録音をほとんど聴こうとはしなかった」(同前、77～79頁) という。

#### 【引用、参考文献】

- \* 赤澤史郎・北河賢三 (1993) 『文化とファシズム——戦時期日本における文化の光芒』日本経済評論社
- \* 赤澤史郎 (1995) 「戦中・戦後文化論」『近代4』(「岩波講座日本通史」第19巻)、岩波書店
- \* 赤澤史朗 (2000) 「戦後日本の戦争責任論の動向」『立命館法学』2000年6号 (274号)
- \* 生明俊雄 (2016) 『二〇世紀日本レコード産業史：グローバル企業の進攻と市場の発展』勁草書房

- \* 有山輝雄 (2001) 「戦時体制と国民化」『戦時下の宣伝と文化』(年報日本現代史第七号)、現代史料出版
- \* 石坂友司 (2004) 「国家戦略としての二つの東京オリンピック——国家のまなざしとスポーツの組織」清水論編『オリンピック・スタディーズ——複数の経験・複数の政治』せりか書房
- \* 石坂友司 (2009) 「東京オリンピックのインパクト——スポーツ空間と都市空間の変容」坂上康博／高岡裕之編著『幻の東京オリンピックとその時代』青弓社
- \* NHK放送文化研究所監修 (2002) 『放送の20世紀——ラジオからテレビ、そして多メディアへ』日本放送出版協会
- \* 岡俊雄 (1986) 『レコードの世界史——SPからCDまで』音楽之友社
- \* 岡田実 (1984) 『マイクで綴るスポーツ史——放送40年の裏表』恒文社
- \* 岡田則夫 (2012) 『SPレコード蒐集奇談』ミュージック・マガジン
- \* 岡田則夫 (2013) 「続・蒐集奇談179—オリンピックのSPレコード」『レコード・コレクターズ』2013年12月号、ミュージック・マガジン
- \* 尾崎正峰 (2018) 「オリンピック、芸術競技、音楽」『一橋大学スポーツ研究2018』通巻37号、一橋大学スポーツ科学研究室
- \* 尾崎正峰 (2020) 『《オリンピック・マーチ》が鳴り響いた空——「オリンピックと音楽」に刻まれる「記憶」』坂上康博・來田享子編『1964年の記憶』青弓社 (近刊)
- \* 北河賢三 (1988) 「戦時下の世相・風俗と文化」藤原彰、今井清一編『十五年戦争史2 日中戦争』青木書店
- \* 倉田喜弘 (1979) 『日本レコード文化史』東京書籍
- \* 高津勝 (1994) 『日本近代スポーツ史の底流』創文企画
- \* 小村公次 (2011) 『徹底検証・日本の軍歌——戦争の時代と音楽』学習の友社
- \* 古茂田信男、島田芳文、矢沢寛、横沢千秋 (1995) 『新版 日本流行歌史 (中) (1938～1959)』社会思想社
- \* 坂上康博 (1998) 『権力装置としてのスポーツ——帝国日本の国家戦略』講談社
- \* 坂上康博／高岡裕之編著 (2009) 『幻の東京オリンピックとその時代——戦時期のスポーツ・都市・身体』青弓社
- \* 志浦哲夫 (2008) 『SPレコード——そのかぎらない魅惑の世界』ショパン
- \* 新藤浩伸 (2014) 『公会堂と民衆の近代——歴史が演出された舞台空間』東京大学出版会
- \* 園部三郎 (1980) 『日本民衆歌謡史考』朝日新聞社
- \* 大日本體育協会編 (1936) 『大日本體育協会編史』上巻、大日本體育協会
- \* 高岡裕之 (2011) 『総力戦体制と「福祉国家」——戦時期日本の「社会改革」構想』岩波書店
- \* 高岡裕之 (2015) 「戦争と大衆文化」『岩波講座 日本歴史』第18巻・近現代4、岩波書店
- \* 高嶋航 (2012) 『帝国日本とスポーツ』塙書房
- \* 高嶋航 (2015) 『軍隊とスポーツの近代』青弓社
- \* 竹山昭子 (2002) 『ラジオの時代——ラジオは茶の間の主役だった』世界思想社
- \* 津金澤聰廣、有山輝雄編著 (1998) 『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社
- \* 津金澤聰廣 (1999) 「メディアイベントとしての軍歌・軍国歌謡」、青木保／川本三郎／筒井清忠／御厨貴／山折哲雄編『戦争と軍隊』(近代日本文化論10)、岩波書店
- \* 戸ノ下達也 (2008) 『音楽を動員せよ——統制と娯楽の十五年戦争』青弓社
- \* 戸ノ下達也 (2010) 『「国民歌」を唱和した時代——昭和の大衆歌謡』吉川弘文館
- \* 戸ノ下達也、長木誠司編著 (2008) 『総力戦と音楽文化——音と声の戦争』青弓社
- \* 永井良和 (1998) 「大衆文化のなかの「満州」」『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社
- \* 中村哲夫 (1985) 「第12回オリンピック東京大会研究序説 (I)」『三重大学教育学部研究紀要』第36巻 人文・社会科学

- \* 中村哲夫 (1989) 「第12回オリンピック東京大会研究序説 (Ⅱ) 『三重大学教育学部研究紀要』第40巻 人文・社会科学
- \* 中村哲夫 (1993) 「第12回オリンピック東京大会研究序説 (Ⅲ) 『三重大学教育学部研究紀要』第44巻 人文・社会科学
- \* 橋本一夫 (1992) 『日本スポーツ放送史』大修館書店
- \* 日本放送協会編 (1977a) 『放送五十年史』日本放送出版協会
- \* 日本放送協会編 (1977b) 『放送五十年史：資料編』日本放送出版協会
- \* 福田俊二、加藤正義編 (1994) 『昭和流行歌総覧 (戦前・戦中編)』柘植書房
- \* 古川隆久 (1998) 『皇紀・万博・オリンピック—皇室ブランドと経済発展』中公新書
- \* 古川隆久 (1998) 「紀元二千六百年奉祝会開催イベントと三大新聞社」『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社
- \* ベンヤミン, W. (高木久雄他訳) (1970) 『複製技術時代の芸術』(ヴァルター・ベンヤミン著作集〈2〉)、晶文社
- \* 細川周平 (1990) 『レコードの美学』勁草書房
- \* 細川周平 (1993a) 「西洋音楽の日本化・大衆化 52」『ミュージック・マガジン』1993年7月号
- \* 細川周平 (1993b) 「西洋音楽の日本化・大衆化 53」『ミュージック・マガジン』1993年8月号
- \* 細川周平 (1993c) 「西洋音楽の日本化・大衆化 54」『ミュージック・マガジン』1993年9月号
- \* 南博+社会心理研究所 (1987) 『昭和文文化1925～1945』勁草書房
- \* 湯地富雄 (1996) 『録音秘話——「前畑ガンバレ」と私』(私家版)
- \* 吉見俊哉 (1998) 「幻の東京オリンピックをめぐる」『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社
- \* 渡辺裕 (2015) 「映画《東京オリンピック》は何を「記録」したか」『アステイオン』083、サントリー文化財団
- \* 渡辺裕 (2017) 『感性文化論——〈終わり〉と〈は

じまり)の戦後昭和史』春秋社

# オリンピックのSPレコード

作曲 作詞 作曲 歌唱等 レーベル 盤番号 発売年月 備考

曲名	作詞	作曲	歌唱等	レーベル	盤番号	発売年月	備考
ロサンゼルス大会(1932)							
1 走れ大地を 走れ大地を	齋藤龍	山田耕祐	中野忠晴 日本コロムビア男声合唱団	コロムビア	26963A 26963B	1932.05	大阪朝日新聞社公募作品
2 いざ勝鬨を(オリンピック選手に捧ぐ) スポーツ日本(オリンピック選手に捧ぐ)	島田芳文 島田芳文	佐々木すぐる 佐々木すぐる	矢野秋雄 矢野秋雄	ヒコキー	70942A 70942B	1932.05	
3 應援歌・オリンピック オリンピックの唄	堀内敬三 西条八十	堀内敬三 中山晋平	日本ピクチャー男声合唱団 四谷文子	ピクチャー	52308A 52308B	1932.05	大日本体育協会、オリンピック後援会 認定応援歌
4 オリンピック水泳選手の歌	入江・清川・河 津合作	椎葉紮民	日本ポリドール合唱団	ポリドール	3636A	1932.04	日本水上競技連盟公認
オリンピック水泳選手応援歌	椎葉紮民	ヴェルデー (江口夜詩: 編曲)	日本ポリドール合唱団		3636B		
5 音頭「オリンピック」 オリンピック小唄	鈴懸絢 杉田忠治	シイハ久二 近藤政二郎	二村定一、船越富美子 二村定一、船越富美子	ポリドール	3637A 3637B	?	
6 オリンピック陸上選手応援歌	岡村二一 サトウ・ハチロー	山本直忠 篠原正雄	日本ポリドール合唱団 日本ポリドール合唱団	ポリドール	3687A 3687B	1932.09	
7 わが友スバイクよ 勝って戻れば 揚がる日の丸	西條八十 西條八十	中山晋平 松平信博	徳山健 四谷文子	ピクチャー	52454A 52454B	1932.09	
8 動物オリンピック大会	中根茂	東京子供音楽会	東京子供音楽会	ピクチャー	52431	1932.10	
9 オリンピック入場式 オリンピック陸上の歌	× ?	× ?	河西三省 吉原治男	太陽	2101	?	架空実況
10 オリンピック水上選手権争奪戦 オリンピック水上の歌	× ?	× ?	河西三省 内田栄一	太陽	2102	?	架空実況
11 オリンピック凱旋歓迎歌 スポーツ讃歌	サトウ・ハチロー サトウ・ハチロー	辻順治 堀内敬三	陸軍戸山学校軍楽隊 陸軍戸山学校軍楽隊	ポリドール	3755A 3755B	1932.11	

ベルリン大会(1936)		ベルリン大会(1936)		ベルリン大会(1936)		ベルリン大会(1936)		ベルリン大会(1936)		ベルリン大会(1936)		ベルリン大会(1936)	
1	起てよ若人	中山晋平	徳山理、合唱団	ピクチャー	53741A	1936.07	読売新聞社企画						
	オリンピックの唄	中山晋平	渡辺はま子・篠崎純		53741B								
2	オリンピック会津磐梯山	村越国保	小唱勝太郎	ピクチャー	53742A	1936.07							
	オリンピックおけさ	村越国保	市丸・三嶋一声		53742B								
3	国際オリンピック派遣選手応援歌	山田耕筰	松平 晃	コロムビア	28843A	1936.05							
	オリンピック応援歌あげよ日の丸	山田耕筰	コロムビア管絃樂團		28843B								
4	オリンピック応援歌あげよ日の丸	山田耕筰	中野忠晴	コロムビア	28844A	1936.05							
	オリンピック応援歌あげよ日の丸	山田耕筰	コロムビア混声合唱団		28844B								
5	オリンピック時代	×	香島ラッキークー	テイチク	50562	?							
6	長屋のオリンピック	×	桂小文治	ピクチャー	J10450	?							
7	二百米平泳決勝	×	山本照	ポリドール	8516A	1936.09	日本放送協会著作権所有						
	女子二百米平泳決勝	×	河西三省		8516B		「前畑ガンハレ」の連呼で有名						
8	八百米リレー決勝	×	河西三省	ポリドール	8517	1936.09	日本放送協会著作権所有						
9	千五百米決勝	×	河西三省	ポリドール	8518	1936.09	日本放送協会著作権所有						
10	開会式実況	×	河西三省	ポリドール	15312	1936.10							
11	マラソン優勝実況	×	山本照	ポリドール	15313	1936.10	孫基植の肉声あり						
12	マラソン実況(孫・南選手の大殊勲)	×	×	アサヒ	155	1936.09	「伯林オリンピック競技場」の副題						
	五千米実況(村社選手の奮闘)	×	×				以下の4枚とも実況再現盤						
13	女子水上二百米決勝実況(前畑嬢優勝)	×	×		156	1936.09							
	水上八百米継泳実況(遊佐・杉浦・田口・新井優勝)	×	×										
14	水上二十五米決勝実況(寺田選手の優)	×	×	アサヒ	157	1936.09							
	水上四百米優勝実況(鶴藤・牧野・根上選手の奮闘)	×	×										
15	平泳二百米決勝実況(葉室選手の奮闘)	×	×	アサヒ	1584	1936.09							
	水上二百米決勝実況(遊佐・杉浦・田口・新井の力泳)	×	×										
16	東京オリンピック	松本一晴	春海静夫	ショーサク	S242	1936 *	発売月不明						
	オリンピック音頭	松本一晴	春海静夫 勝丸										
17	マラソン放送日本優勝	×	寺本貞雄	ショーサク	S243	?	存在未確認						
	三段跳躍放送	×	長谷川博俊										
18	水上二百米決勝:日本優勝	×	石崎貴久子	ショーサク	S244	?	童謡歌手による架空実況						
	女子二百米決勝	×	村田美代子										
19	スポーツ日本	久保田晋二	新美博義	コロムビア	29099	1936.12	童謡 オリムピック選手歓迎歌						
	胸の日の丸	久保田晋二	中島けい子										
20	オリンピック選手歓迎歌	西條八十	伊藤久男、男声合唱団	コロムビア	29100A	1936.12							
	オリンピックおし	西條八十	豆千代		29100B								
21	談話オリンピックの感激	西條八十	茨屋寿光、田島直人ほか	コロムビア	29105A	?	日本陸上競技連盟監修						
	オリンピック選手歓迎歌	西條八十	伊藤久男、男声合唱団		20105B								
22	コドモオリンピック	若杉雄三郎	平山美代子、中山権子、尾村まさ子	ピクチャー	J30180	1937.09							
23	花前畑嬢	×	静田錦波	タイハイ	21093	?							

【幻の】東京大会(1940)等							
1	東京オリムピック	上山雅輔 佐伯孝夫 上山雅輔 佐伯孝夫	上野勝教	古川緑波	ピクター	53860A 53860B	1936.12
	スポーツ小唄		上野勝教	徳山璉・能勢妙子			
2	東京オリムピック	佐々木緑亭 村田良一	安部盛 江口四郎	小野巡、浅草さくら子 児玉好雄、柳ほし竹弥	ミリオン	125A 125B	1937.06
3	オリムピック踊	佐藤惣之助 佐藤惣之助	大村能章 草笛圭三	三門順子、樋口静雄 近衛八郎、三浦房子	キング	10157A 10157B	1937.08
4	映画主題歌:「国民の誓い」オリムピックの歌	?	山田耕祐	コロムビア合唱団	コロムビア	?	1938.06 朝日新聞社懸賞当選歌

ヘルシンキ大会(1952)							
1	オリムピックの歌	山田千之	高田信一	藤山一郎・荒井恵子	コロムビア	A1300A	1952.01 日本体育協会、日本放送協会 読売新聞社 選定(1~5:各社の競作)
	行進曲「オリムピックの歌」	x	高田信一	コロムビアフラスバンド		A1300B	
2	オリムピックの歌	山田千之 佐伯孝夫	高田信一 服部正	灰田勝彦 ピクター合唱団 灰田勝彦、久慈あさみ	ピクター	V40741A V40741B	1952.02
3	オリムピックの歌	山田千之	高田信一	長門美保、畑中良輔 長門歌劇団合唱団	キング	C779A	1951.12
	オリムピックの歌	x	高田信一	キングオーケストラ		C779B	
4	オリムピックの歌	山田千之	高田信一	竹山 逸郎	テイチク	C3286	?
5	オリムピックの歌	山田千之	高田信一	瀬川伸・エト邦枝	タイハイ	H10206	?
6	オリムピック目指して	今井広史	古関裕而	伊藤久夫・岡本敦郎	コロムビア	AK31	?

メルボルン大会(1956)							
1	オリムピックの華	x	服部 正	ピクター オーケストラ	ピクター	AE302	1956.06
2	オリムピックの歌	?	?	林伊佐緒・井口小夜子	キング	C1344	?

ローマ大会(1960)							
1	オリムピック行進曲	x	佐野 雅美	ピクター・オーケストラ	ピクター	AE487	1960.07
2	憧れのオリムピック	坂口淳	平岡 照章	田端 典子	ピクター	B703	1960.06

注:二段の表記のレコードは、上段がA面、下段がB面

出典:下記の資料をもとに尾崎作成。

\* 岡田則夫「続・蒐集奇談179ーオリムピックのSPレコード」『レコード・コレクターズ』2013年12月号、ミュージック・マガジン

\* 志浦哲夫『SPレコード——そのかぎりない魅惑の世界』シヨパン、2008

\* 倉田喜弘『日本レコード文化史』東京書籍、1979

\* 堀田俊二、加藤正義編『昭和流行歌総覧(戦前・戦中編)』柘植書房、1994

\* 国立国会図書館「歴史的音源」(<http://reklon.dl.ndl.go.jp/>) 2019年2月2日 閲覧)

\* 78MUSIC(<http://78music.web.fc2.com/index.html>) 2019年7月7日 閲覧)